渡邉義浩・仙石知子著

三国志演義事典

大修館書店／2019年6月／376頁

2019年の夏休みを中心に、上野の国立博物館で「日中文化交流協定締結40周年記念」と銘打って『特別展 三国志』が開催され、年末年始を挟んでは九州に巡廻している。その展覧会での講演に登場するなど、本書の著者である渡邉氏は同企画に深く関わっているようである。

『三国志』が正史であり、『三国志演義』は日本での表記で正しくは『三国演義』であること、その前に『三国演義』自体が「演義」、すなわち「お話」であることは、高校世界史レベルの話題であろう。また、比較的近くでは横山光輝描くマンガ『三国志』で中国史に関心を持った者も多いであろうし、古くは吉川英治が新聞小説として発表した『三国志』を通じて、社会の縮図を感じ取った場合も多いのではないだろうか。

それはさておき、『人事の三国志』（朝日選書）、『はじめての三国志』（ちくまプリマー新書）など、『三国志』がらみの書籍を多数出版している渡邉氏は1962年生まれ、『世説新語』や顔之推、范曄など、古代中国の史論、思想史研究でも多くの業績を上げられている。日本における三国志研究の第一人者であることは、すでに2018年の『中国21』Vol. 47「書訊」において述べている。いわば、守備範囲の極めて広い研究者である。その渡邉氏に加えて、本書では同じ中国古代思想研究者である仙石知子氏を加えている。

さて、本書は『三国志』が『三国志演義』となるプロセスを第Ⅰ章におき、そこに毛宗崗本と呼ばれる通行本と、そこに収録されなかった部分について整理する。その中で、「蜀漢正統論の形成」など、現在の日本にも厳然と存在している通俗的三国志理解の形成過程がまとめられ、ハリウッド映画を含む現状まで筆が及ぶ。第Ⅱ～Ⅵ章は毛宗崗本に現れた物語の展開と三国志に関わる各時代の「人物小伝」とが順番に並べられている。そして、第Ⅶ章は本書の「白眉」と渡邉氏が自薦する部分である。ここで「通行本となった毛宗崗本が、藍本（「底本」）としての李卓吾本から、どのように叙述を変えることで文学としての完成度を高めたのかを説明」しようとしたのである。さらに、「演義」を通じて広く庶民レベルにまで広がった「関帝信仰」については第Ⅹ章を用意し、それ以前の「戦いの諸相」「謀略と表象」を見ると、現在の経営者が「歴史に学ぶ」と称するときのネタの根拠が記されているが、必ずしも通俗的な理解と一致しているわけではないことが読み取れる。

『三国志演義』が単なる通俗読み物ではないことを記すだけでもかなり衝撃的であるが、それに加えて登場人物について通り一遍の理解しかしていない者には、かなりショックを受ける本ではないだろうか。（三好 章）